



カンボジアに暮らして

- NGOを通して人間の原点を学ぶ -

やぎさわ
八木沢

かつまさ
克昌

社団法人「シャンティ国際ボランティア会」(SVA)・カンボジア事務局長

カンボジアを最初に訪れたのが、今から26年前の1982年。当時は、ベトナム軍が駐留し、旧ソ連を中心とした東側の援助が入り、社会主義体制だった。外国人は、宿泊するホテルも制限され、行動も制限されて、どこに行くにも全て外務省の担当官が同行した。

このカンボジアに、3年間駐在した前赴任国の社会主義国ラオスから2年前から駐在して、NGOの職員として、教育と文化を中心とした国際協力に関わっている。現在のカンボジアは、26年前とのあまりの変わりように驚く毎日だ。現在、首都、プノンペン、レクス、ランドクルザー等の高級車とバイクの洪水、そしてモノが溢れて、空前の建設ラッシュ。カンボジアのシンボル、アルコール・ワットも当時は、観光客もまばらでホテルは一軒だけだったのが、今ではホテルの建設ラッシュで年間、200万人の観光客が訪れている。貧富の格差もさまざま、当時、無かったスラムもプノンペンだけで、700カ所、人口にして30万人が暮らしている。そして、辺境の農村は、26年前と変わらず貧困に苦しみ時間が止まったようだ。

カンボジアは、日本の半分の面積に、人口1,400万人が住む。GDPは、約500ドル。世界の最貧国の一つ。1975年から1979年まで続いたポルポト政権下で、全ての都市住民が農村への強制移住、

通貨、市場、私有財産の廃止、寺院や学校等の閉鎖、鎖国、教師、医師などの知識人の都市住民の虐殺と過激な変革が導入された。この間、200万人が虐殺等で命を失ったといわれている。カンボジアが国際社会から認められて、長い内戦が終結したのは、パリ和平協定が結ばれた1991年。街から銃声が消えて本当に平和になったと、実感できるのは僅か10年前から。

カンボジアで私たち、SVAが事務所を開設したのは、1991年。「すべての子どもたちに学校を」「すべての子どもたちに本を」を目的に最初に行ったのは、カンボジアの教育・文化支援をするための印刷職業訓練所の開設。読書推進のための図書館活動をするにも、ポルポト時代に焚書政策で図書を失い、カンボジア語の本がほとんどなかった。まず、カンボジア語の図書、絵本を印刷・出版することから始まった。そして、今でも、カンボジア語の絵本や図書、紙芝居等を出版し続けている。

現在、私たちがカンボジア国内で行っているのは、読書推進のための図書館活動。SVA、カンボジア教育省とJICAの協力によりカンボジア全国の小学校に図書館を設置するための教育省での人材育成とアンコール・ワットで知られるシェムリアップ州等でのモデルの小学校の図書館活



(カンボジアの典型的な農村の小学校)

動。辺境の農村の村や首都プノンペンのスラムでの移動図書館活動。カンボジアで独自に出版したカンボジア語の図書と日本からカンボジア語に訳されて届けられた世界の名作といわれる絵本も活用されている。

そして、もう一つの私たちの活動の中心は、現在、全国で15,000教室が不足している小学校の建設。年間に約15校を建設し、これまでに農村の最貧困の村を中心に小学校だけでも185校を建設している。小学校は、村の子どもたちから大人まで参加する住民参加方式によって小学校が建設されている。学校建設は、辺境の最貧困層の村を対象とするために、雨季の悪路との戦い、地雷、マラリア等の闘いがある。午前中通れた道が、午後になると道が冠水したり橋が流されたりすることもある。辺境の農村の小学校には、教科書も数人に一冊。生まれてから教科書以外の本を手にしたことがない子どもたちが大半。文字の読み書きを習っても、本の不足から文字から知識を学ぶ喜びを知らない子どもたち。カンボジア全体で小学校6年を終えるのは、48パーセント。学校も教師も、そして、教科書や教材が絶対的に不足している。その一方で、プノンペンや地方都市の富裕層の子どもたちは、幼稚園から英語を勉強している。貧富の格差は、広がる一方で教育の格差も都市と農

村で広がる一方。

カンボジアの人口の半分を占める子どもたち。私たちの活動対象地の農村やスラムで子どもたちに「お菓子和絵本どっちが欲しい」と、質問すると、必ず「本」という答えが返ってくる。「お菓子は食べたら無くなるけれど、本はずっと読めるから本がいい」という。どんな貧しい農村の子どもたちからも同じ答えが返ってくるから驚きだ。本が宝物となっている。そして、小学校1年生となると弟、妹の面倒をよくみて、よく働き礼儀正しいことには、驚かされる。内戦、ポルポト時代を経験して、現在も様々な困難な環境にありながらも、カンボジア人としての伝統や文化も継承されて民族の誇りを失っていないことには驚かされる。

カンボジアの社会は、希望と絶望が混在しているような中でも人々の生活に不思議な活力がある。人間の原点や教育の原点、平和とは、貧困とは、幸福とは何かについて、日常生活の中で深く考えさせられる日々だ。貧困とは、単に衣食住医が欠如する状態ではなく、自らの明日を選択する機会があるかどうかでなないかと思う。一人でも多くのカンボジアの子どもたちが、貧困から抜け出すための教育の機会を得るために地道にカンボジア人スタッフと共に活動を続けていきたい。